愛知教育大学教育実践総合センター紀要
第13号，pp. 1～ 7（February，2010）

生活科の授業を改善する教師の研修プログラム

太　町　　智（豊川市立平尾小学校）
中　野　真　志（愛知教育大学生活科教育講座）

A Training Program for Improving Lesson in Living Environment Studies.

Satoshi OHMACHI （Toyokawa Hirao Elementary School）
Shinji NAKANO （Department of Life Environment Studies, Aichi University of Education）

要約　生活科は，他教科等に比べ設置されてからの日が浅く，学校現場の一部では，その趣旨が未だに正しく理解されていない現状がある。こうした現状から，この分野に関する研修を充実させていく必要がある。本研究では，生活科を担当する教師の実践的力量を向上するために，試験的な研修プログラムを開発した。そして，このプログラムを，様々な研究会や研修会で活用していく中で，より効果的な研修プログラムのあり方について検討し，さらに，改善していくことに取り組んでいる。

Keywords：生活科，研修プログラム，フィールドワーク

Ⅰ　研究の目的および背景

学校教育に対する社会的な要請および子どものニーズが多様化・複雑化する今日，優れた実践的力量を備えた教員の養成，現職教員の研修は不可欠となっている。

特に，生活科においては，全面実施されて17年が経ち，その理論と実践については概ね定着したといえるものの，伝統的な教科に比べ設置されてからの日が浅く，未だにこの教科の授業を担当したことのない教師は多い。

野田敦敬氏が2003年に実施した調査研究によれば，生活科全面実施から11年間で，女性教員の86％が生活科の授業を担当した経験をもっているのに対し，男性教員は36％に留まっている。また，「生活科の目標がよく分からない」と回答した教員が全体の32％を占めている。[1)]

そのため，この教科の趣旨が正しく理解されず，単に活動するだけにとどまっていたり，画一的な教育活動に陥ったりしている傾向もしばしば見受けられる。さらに，各県・市等の教育センター及び教育研究所等では，人員削減により，生活科専門の担当者がいなくなる傾向にあり，生活科の研修は停滞しがちな現状にある。

このような現状を踏まえ，我々は，生活科における教師の実践的力量を促進する効果的な研修プログラムを開発し，校内研修や各地の研究会，研修会等において活用することで，これらの問題を改善したいと考えた。

Ⅱ　試験的な研修プログラムの開発

研修プログラムを開発するための本研究の全体計画

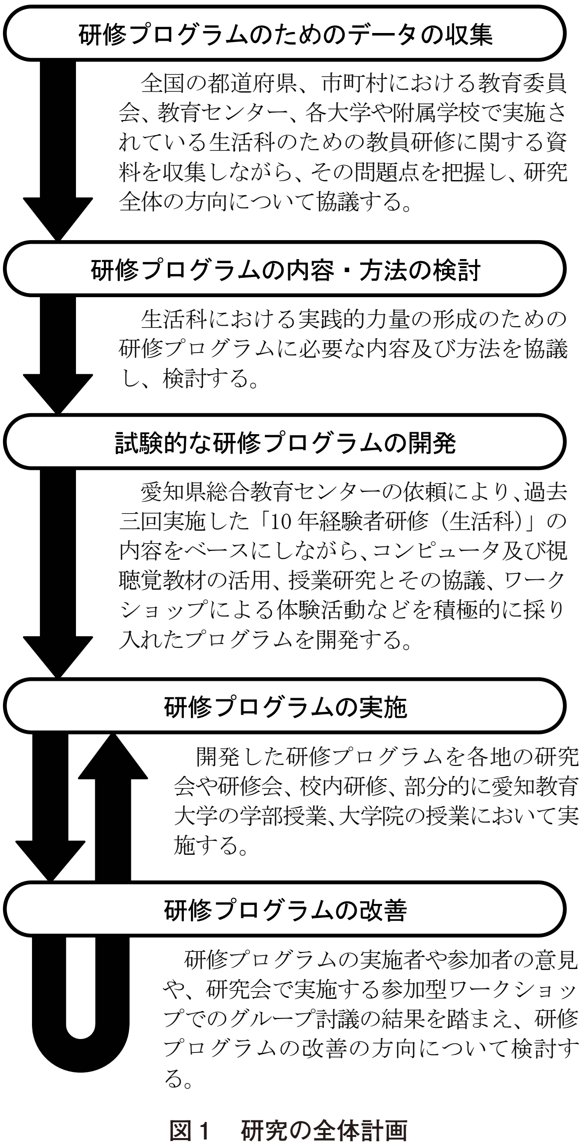

図１　研究の全体計画

表１　開発した研修プログラムの概要

テーマ	主な内容（抜粋）
生活科の本質，教科の独自性	・生活科新設の経緯や背景，改訂の要点 ・生活科と「総合的な学習の時間」の関連 ・生活科で期待される教師像
生活科の年間指導計画作成の要点	・生活科のカリキュラムを作成する際に必要な視点 ・生活科の学習指導の特質 ・充実した年間指導計画の作成
生活科の単元構成の基本的な考え方	・生活科の単元の特徴 ・生活科の単元構成の流れ ・単元の種別による構成の考え方
授業・授業計画の考え方	・低学年児童の発達特性の理解や子どもたちを見取る目 ・子どもへの指示・助言，発問の工夫 ・子どもの思いを最大限に引き出す学びへのアプローチ
生活科における評価のあり方	・生活科独自の評価の考え方 ・生活科の学習を評価する３つの観点 ・評価における留意点
気付きの質を高める	・生活科における「気付き」 ・知的な気付きを高める ・気付きの質を高める学習指導の進め方

は，図１のとおりである。

試験的な研修プログラムを作成するために，生活科を担当する上で特に重要となるテーマをいくつかピックアップした。テーマの実際については，表１のとおりである。そして，それらのテーマについて，コンピュータおよび視聴覚教材の活用，授業研究とその協議，ワークショップによる体験活動などを取り入れた研修プログラムを開発することにした。

Ⅲ　研修プログラムの改善

研修プログラムを改善するために，作成したスライドを用いた研修プログラムを様々な場で活用していく中で，改善の方法を検討した。

ここでは，「生活科の本質，教科の独自性」を例に紹介する。作成したスライドは，図２および図３である。このテーマでは，生活科が新設された経緯や背景，そして，学習指導要領に示されている教科目標や内容について詳しく説明するとともに，「総合的な学習の時間」との関連や，期待される教師像にまで踏み込んでいる。

2009年５月16日に実施された「日本生活科・総合的学習教育学会愛知支部（ＬＥＳ愛知）」５月例会では，研修プログラムについての検討が行われた。

少人数のグループに分かれてのディスカッションでは，研修プログラムのスライドを実際に見ながら，活発な意見交換がなされた。

それぞれのグループで話題になったことをまとめたものが，表２である。参加者からは，初任者や生活科担当経験のない教員に対して配慮すべきこと，スライドの活用方法や工夫すべき点等について，様々な意見が出された。

同様に，その他のテーマについても，意見交換を行った。

「気付きの質を高める」では，「気付き」とは何かということが難しいという声が多く出された。改訂された学習指導要領には，気付きについての記述があるが，読むだけでは理解が難しく，具体的な事例で紹介する必要があると思われる。また，気付きの「自覚化」の重要な役割を果たす「言葉」についての関心も高く，多くの意見が出された。子どもが気付きを言葉にする機会を作ったり，教師が子どもの言葉を受け取って，もう一度言葉で返したりすることが重要であり，このことについても，具体的な事例があることで，理解が深まるのではないかということが話題になった。

「生活科における評価のあり方」では，生活科の評価の３つの観点「生活への関心・意欲・態度」「活動や体験についての思考・表現」「身近な環境や自分についての気付き」について，話題が集まった。どのような評価規準を作るのか，それを評価する子どもの具体的な姿の例を知りたい，といった声が聞かれた。

Ⅳ　体験的なプログラムの導入

生活科の授業において，具体的な体験や活動は欠かせないものである。研修プログラムにおいても，参加者が実際に様々な体験や活動をすることによって，生活科という教科の本質に迫れるのではないかと考えた。

1－1　生活科新設までの経緯

●昭和43年　小学校学習指導要領改訂
　・低学年社会科、理科の改善
　観察や表現の活動を重視
　自然の事物・現象に直接はたらきかけ
●昭和46年　中央教育審議会答申
　・小学校低学年教育課程の再検討の指摘
　総合的な教育が可能な教育課程の編成を求めた

●昭和50年　教育課程審議会「中間まとめ」
　・社会科と理科の内容を中心とした新教科設定の検討
●昭和51年　教育課程審議会答申
　・低学年における合科的な指導の推進
●昭和52年　小学校学習指導要領改訂
　・「低学年においては、合科的な指導が十分にできるようにすること」が強調
　　→合科的な指導の困難

1－2　生活科新設の背景と要因

●思考と行動の未分化という発達特性
　→具体的な活動や体験を通した総合的な指導や支援がこの時期の教育活動に必要

●幼児教育と小学校教育の接続と発展
　→遊びを中心に活動が展開される幼児教育と、遊びと学習が区別される小学校教育との断絶を埋めるため

1－2　生活科新設の背景と要因

●自然離れ、生活習慣と生活技能の不足
　→子どもの自然離れと日常生活に必要な生活習慣や生活技能の不足という状況とその実態への対応
●低学年の社会科と理科の実態への反省
　→これまでの社会科と理科の学習指導の実態が、表面的な知識の伝達に陥る傾向にあった

2－1　生活科の教科目標＜平成元年＞

具体的な活動や体験を通して，
自分と身近な社会や自然とのかかわりに
　関心をもち，
自分自身や自分の生活について考えさせる
　とともに，
その過程において生活上必要な習慣や技能
　を身に付けさせ，
自立への基礎を養う。

2－2　生活科の内容＜平成元年＞

●基本的な視点
　①自分と社会（人々，物）とのかかわり
　②自分と自然とのかかわり
　③自分自身

2－2　生活科の内容＜平成元年＞

●具体的な視点
ア　健康で安全な生活　　イ　身近な人々との接し方
ウ　公共物の利用　　エ　生活と消費
オ　情報の伝達　　カ　身近な自然との触れ合い
キ　季節の変化と生活とのかかわり
ク　物の製作　　ケ　自分の成長
コ　基本的な生活習慣や生活技能

3－1　改善の基本方針と具体的な事項
＜平成元年→平成10年への改訂＞

●生活科の改善の基本方針
・児童が身近な人や社会，自然と直接かかわる活動や体験を一層重視すること

・直接かかわる活動や体験の中で生まれる知的な気付きを大切にする指導が行われるようにすること

・各学校において，地域の環境や児童の実態に応じて創意工夫を生かした教育活動や，重点的・弾力的な指導が一層活発に展開できるようにすること

3－1　改善の基本方針と具体的な事項
＜平成元年→平成10年への改訂＞

● 改善の具体的な事項
・　第1学年と第2学年に分けて示していた内容を2学年まとめて示すとともに，2学年で行われていた合計12の内容を8つの内容で構成することにした。
・　地域にある自然や施設を活用するにあたっては，扱う対象や場を広く選択できるように，例えば，公園，乗り物や駅といった具体的な公共施設名を削除した。
・　具体的な活動や体験を行う中で、児童が身近な幼児，高齢者，障害のある児童生徒など多様な人々と触れ合うことができるよう配慮する。
・「総合的な学習の時間」との関連に配慮し，児童が一層自分の思いや願いを生かし，主体的に活動することができるように他教科との合科的・関連的な指導を一層推進する。

3－2　改訂の要点
＜平成元年→平成10年への改訂＞

●目標の改善
　具体的な活動や体験を通して，自分と身近な人々，社会及び自然とのかかわりに関心をもち，自分自身や自分の生活について考えさせるとともに，その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ，自立への基礎を養う。

図２　「生活科の本質・教材の独自性」の研修プログラム（スライド）前半

3－2　改訂の要点
＜平成元年→平成10年への改訂＞

●内容の改善
第1学年：6内容，第2学年：6内容
↓
第1、2学年まとめて：8内容に厳選

●内容構成の考え方の改善
・基本的な視点
①自分と人や社会とのかかわり
②自分と自然とのかかわり
③自分自身

3－2　改訂の要点
＜平成元年→平成10年への改訂＞

●具体的な視点
ア　健康で安全な生活　イ　身近な人々との接し方
ウ　公共の意識とマナー　エ　生活と消費
オ　情報と交流　カ　身近な自然との触れ合い
キ　時間と季節　ク　遊びの工夫
ケ　成長への喜び
コ　基本的な生活習慣や生活技能

4－1　学習指導要領の基本理念と改善事項
＜平成10年→平成20年への改訂＞

●改訂の基本的な考え方
(1)改正教育基本法等を踏まえた学習指導要領改訂
(2)「生きる力」という理念の共有
(3)基礎的・基本的な知識・技能の習得
(4)思考力・判断力・表現力等の育成
(5)確かな学力を確立するために必要な授業時間数の確保
(6)学習意欲の向上や学習習慣の確率
(7)豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実

4－2　生活科の課題と改善事項
＜平成10年→平成20年への改訂＞

●生活科の課題
(1)活動や体験を通して得られた気付きを質的に高める指導が十分に行われていない
(2)表現の出来映えのみを目指す学習指導が行われる傾向があり、表現によって活動や体験を振り返り考えるといった、思考と表現の一体化という低学年の特性を生かした指導が行われていない。
(3)児童の知的好奇心を高め、科学的な見方・考え方の基礎を養うための指導の充実を図る必要があること
(4)生命の尊さや自然事象について体験的に学習することを重視する
(5)幼児教育と小学校教育との具体的な連携を図る

4－2　生活科の課題と改善事項
＜平成10年→平成20年への改訂＞

●改善事項
(1)気付きの明確化と気付きの質を高める学習活動の充実
(2)伝え合い交流する活動の充実
(3)自然の不思議さや面白さを実感する指導の充実
(4)安全教育や生命に関する教育の充実
(5)幼児教育及び他教科との接続

4－3　改訂の要点
＜平成10年→平成20年への改訂＞

●目標の改善
・教科目標の改訂なし
・学年の目標は、自分自身に関する目標が加わる

(3)　身近な人々，社会及び自然とのかかわりを深めることを通して，自分のよさや可能性に気付き，意欲と自信をもって生活することができるようにする。

4－3　改訂の要点
＜平成10年→平成20年への改訂＞

●内容の改善
・内容(8)が増加

(8)　自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を行い，身近な人々とかかわることの楽しさが分かり，進んで交流することができるようにする。

4－3　改訂の要点
＜平成10年→平成20年への改訂＞

●内容構成の考え方の改善
・基本的な視点：改訂なし
・具体的な視点：10→11に増加
ア　健康で安全な生活　イ　身近な人々との接し方
ウ　地域への愛着　エ　公共の意識とマナー
オ　生産と消費　カ　情報と交流
キ　身近な自然との触れ合い　ク　時間と季節
ケ　遊びの工夫　コ　成長への喜び
サ　基本的な生活習慣や生活技能

5－1　「総合的な学習の時間」の創設

●平成10年での学習指導要領において新設
●小学校第3学年から中学・高校
●教科の枠組みにとらわれず、横断的・総合的な課題等について、環境との直接的なかかわりや体験的な学習、問題解決的な学習を取り入れ、各教科等で身に付けた知識を相互に関連づけ、総合的に働かせることをねらいとしている。

5－2　生活科と「総合的な学習の時間」の関連

●生活科は…
・「総合的な学習の時間」と性格が類似
・「総合的な学習の時間」の土台を担う教科
●類似点
・子ども一人ひとりが自らの学習を構築していく活動
・「学ぶ」ことと「生きる」ことが結びつく学習
⇔短絡的に結びつけるのではなく、各学年の子どもたちの発達特性に適した目標、及び学習経験を考慮しなくてはいけない

図３　「生活科の本質・教材の独自性」の研修プログラム（スライド）後半

表２　「生活科の本質，教材の独自性」の研修プログラムを体験しての参加者の声

○生活科の目標や，学習指導要領の改訂のポイントだけではなく，「独自性・本質性」を前面に出すべき。例えば，以下のことを強調するといいのではないか。
・生活科新設までの経緯では，昭和42年の「体験を重視している」ことも付け加える。
・基本的な視点に「自分自身」がある。
・具体的な視点がある。
・平成10年改訂で「人々」が加わった。
○生活科の新設の経緯では，「40年代は～，50年代は～」のように，初任者にわかりやすく示す方がいいのではないか。
○会議名など，用語の難しさをどう改善していくべきか検討するとよい。
○改訂の議論と生活科の議論がわかりやすいようにするとよい。
○生活科のイメージをもちやすいように，絵や写真を入れるとよいのではないか。
○このスライドを広げながら子どもたちの実際の活動の写真をいれると，わかりやすいのではないか。
○現場の教師として，生活科で期待される教師像がわかると嬉しい。
○研修で使われる時は，使いたいところをピックアップして行うとよいのではないか。
○生活科新設当時と違い，現在，生活科が行事化されているのではないか。
○現場の教師は忙しいので，生活科で育てる子どもの姿をいれるとわかりやすいのではないか。
○生活科新設前までのことが大切なのではないか。なぜかというと，低学年社会科ではできなかったために，生活科が新設されたのではないか。
○期待される教師像では，「内省する教師像」が必要ではないか。
○生活科を行えば，教師も育つことができるのではないか。
○生活科と総合的な学習の時間の相違点を載せた方がよいのではないか。

　ここでは，2007年１月15日に愛知教育大学大学院の授業において，そして，2007年２月５日に富士松北小学校の校内研修において実施したフィールドワークを取り入れた研修プログラムを紹介したい。[2)]

表４　ワークシート（Ａ４サイズ）

	人	社会	自然
目			
耳			
鼻			
舌			
手			

　この研修プログラムでは，最初に，表３のような参考資料を用い，生活科におけるフィールドワークの視点とその方法を簡単に説明した。[3)]

　実際にフィールドワーク研修を行った時間は約40分間であり，各個人が表４のワークシートに記入しながら，グループ毎に校内と学校周辺を散策し，デジタルカメラで撮影した。このワークシートは，校内と学校周辺の人，社会，自然という教材を発見すること，五官をフルに使うことを意図したものである。そのときの様子が図４である。

　研修を実施した結果，大学院生らのグループは，与えられた参考資料をもとに，写真撮影やワークシートへの記入をすることができた。一方で，校内研修では，何人かの教員に戸惑いが見られた。すべての教員が生活科を経験しているわけではないので，人，社会，自然とは何であるのか，五官をフルに使うとはどうすることであるのか，

図４　研修の様子

表３　子どもがかかわる対象に関する参考資料

【子どもがかかわる対象】例えば，下記のような対象

自然	川や土手，林，野原，山，海など。また，そこで見ることのできる生き物，草花，樹木など。その他に雪，氷，風，光など。
社会	公共物（地域や公園にあるベンチ，遊具，水飲み場，トイレ，ごみ箱，図書館や児童館の本，博物館の展示物，乗り物や駅，停留所，道路標識，横断旗など）。公共施設（公園，児童館，公民館，図書館，博物館，美術館など）。
人々	近所の店の人，友だちの家族，公共施設で働く人，幼稚園・保育園の園児や先生，近所の人，子供会の人。

【ポイント】

・低学年の子どもの視点…小学校１・２年生が興味，関心を示すような人，物，ことは何か。
・繰り返しかかわることのできる対象は何か。
・五官（目，耳，鼻，舌，手）をできる限り使って探検，観察する。
・時間の変化，四季の変化に気付きやすい対象は何か。

具体的にイメージする手だてや事前研修が必要であっただろう。

しかし，いずれにせよ，実際にある地域の対象（教材）から具体的な活動や体験をイメージすることは，子どもたちの学習を構想する上で大変重要であることは間違いないことだろう。

Ⅴ　研究から見えてきたこと

これまでの研究を通して，研修プログラムの改善の方向について明らかになったことがいくつかある。

・具体的な子どもの姿が見えるものに

生活科においては，子どもの姿を通して学ぶことは，大きな意味がある。子どもが具体的に活動する姿，思考する姿などを読み取ることが，子どもの発達段階や教科の特質から特に求められるからである。

そのため，研修のプログラムにおいて，子どもの具体的な姿や制作物，記録等の映像（写真や動画等）の事例を盛り込むことで，これらを見取ることのできる教員を育成できると考えられる。

以下，今後，研修のプログラムに取り入れることができそうな活動を例示したい。[4)]

図５　厚紙を切る様子

図５は，牛乳パックや箱に使われている厚紙などを使ってブーメランを作っている子どもたちの様子である。この授業では，一番よく飛ぶブーメランを作ることを目標にして，子どもたちがブーメランを作りながら，気付いたことをワークシートに書いたり，みんなの前で発表したりしている。

このような学習活動では，子どもたちのつぶやきを受けて，教師が具体的にどのような支援，言葉かけができるかが大きなカギを握る。

図６　ブーメランを飛ばす

図６は，子どもたちが作ったブーメランを飛ばしている場面である。ここでは，児童の様々なつぶやきが聞かれる。このつぶやきに対して，教師として，どのような言葉をかけるか，研修の中で検討するとよいだろう。

具体的には，次のようなつぶやきについて検討するとよいだろう。

【つぶやき１】すぐに落ちちゃった。
【つぶやき２】なかなか飛ばないな。
【つぶやき３】遠くまで飛んだよ。

【つぶやき１】や【つぶやき２】に対しては，どうして落ちてしまったのか考えさせる教師の言葉かけが必要であろう。上手に飛ばしている子に目を向けさせる支援も考えられる。他の方法を提示する支援もあるだろう。

【つぶやき３】に対してはどうだろう。たくさん飛ばしたことは大いに賞賛するべきことだが，その結果だけに満足しないようにしたいものである。どうやったら遠くまで飛ぶブーメランができたのか考えさせる言葉かけが必要である。

このように，具体的な子どもたちの姿から，具体的にどのように対応するのか検討する活動を研修プログラムの中に取り入れることが，生活科の授業を改善する上で有効だろう。

・初任者，生活科担当経験のない教員を意識したものに

先述したように，生活科を担当したことのない教員は少なくない。研修の目的にもよるが，初任者や生活科を担当したことのない教員が参加する研修会では，一般的な内容についても具体例で示したり，経緯を解説したりといったことが必要となる。

生活科のキーワードとも言える「気付き」については，平成20年学習指導要領解説生活編において，「対象に対する一人一人の認識であり，児童の主体的な活動によって生まれるものである。そこには，知的な側面だけではなく，情意的な側面も含まれる。また，気付きは次の自発的な活動を誘発するものである」と説明されている。しかし，生活科を担当したことのない教員であれば，この説明だけで気付きを理解することは難しいだろう。

また，先述のフィールドワークで明らかになったように，生活科を担当したことのない教員にとって，子どもたちの身近な人，社会，自然が具体的にどのようなものかといったイメージは簡単にできるものではない。

研修プログラムは，このような教員にとって有効なものでなくてはならない。より具体的な例，具体的な子どもの姿で示すように改善していく必要がある。

・体験的な活動を取り入れたプログラムに

生活科という教科の特質から，教員自身が子どもたちと同じ目線で体験的な活動に参加することが大切である。研修プログラムの内容に応じた有効な体験的な活動を検討していく必要がある。

校内研修であれば，校内や校区のフィールドワークを取り入れるとよいだろう。このことは，生活科の研

修をいう枠を超え，教員自身が子どもたちの身近な環境を知る良い機会となる。

さらに，気付きの質を高めるためにも，体験的な活動が不可欠であるといえるだろう。なぜなら，教師による「体験の示唆」が，気付きの質を高める上で必要だからである。

木肌の違いに気付かせたり，近くを流れる川の冷たさや秋の落ち葉の温かさを感じさせたり，街角の商店から漂う匂いを感じ取らせたりすることは，教師の働きかけがなければ難しい。

研修場所についても，自然の多い場所，商店街や住宅が多い場所など，様々なことが考えられる。校内研修であれば校区を中心にフィールドワークをするのがよいだろうが，もっと大きな規模の研修会であれば，フィールドワークを行う場所について，「人」「社会」「自然」のバランスを考慮する必要があるだろう。

研修テーマ：気付きを高める教師の支援・指導

- **研修時間**　３時間
- **研修場所**　〇〇小学校△△教室
〇〇小学校校区
- **研修内容**

研修プログラム「気付きの質を高める」（15 分）

研修プログラム「気付きの質を高める」より、一部を抜粋して説明する。「気付き」についての基本的な理解を促進することを目的とする。

ワークショップ（45 分）

実際の授業の一場面をビデオ等で視聴し、子どもたちがどんなことに気付いたか、そして、その気付きをどのようにしたら広げたり深めたりすることができるか、小グループでディスカッションする。

フィールドワーク「校区探検」（60 分）

フィールドワークの方法について説明をしてから出かける。「人」「社会」「自然」に対して、目や耳だけでなく、鼻や舌や手をフルに使ってかかわる。また、デジタルカメラを使って撮影も行う。

フィールドワークの振り返り（45 分）

フィールドワークで気付いたことをまとめたり、発表したりしながら振り返る。参加者同士でそれぞれの気付きを共有する。

研修プログラム「気付きの質を高める」（15 分）

研修プログラム「気付きの質を高める」より、一部を抜粋して説明する。気付きの質を高めるために必要な教師の支援について説明する。

図７　研究プログラムの活用事例

・柔軟性のあるプログラムに

今日，様々な理由から教員は極めて多忙であり，研修にかけられる時間も限られている。研修の目的，かけられる時間，参加者に応じて内容を変えることのできる柔軟性のあるプログラムでなければ活用されないだろう。

今回開発したプログラムは，６つのテーマについて，それぞれ１時間程度の研修を想定して作られている。

図７は，研修プログラムの活用事例のモデルである。このような形で，必要に応じて，それぞれのテーマから内容を抜き出して活用する方法が有効だと考えている。

我々は，今回作成した研修プログラムを引き続き，実際の校内研修，研究会，大学及び大学院の授業等で活用しながら，改善，修正を重ねていく予定である。また，「総合的な学習の時間」についても，同様の研修プログラムを開発している。その内容については，別途，稿を改めて叙述したい。

注

１）野田敦敬「生活科学習の改善に向けての調査研究 ― 愛知県内における生活科学習への教師の意識調査を基にして ―」愛知教育大学，『愛知教育大学研究報告』第53輯（教育科学編），１～８頁，2004年

２）中野真志「生活科におけるフィールドワーク研修プログラム ― 五官を活用して，人，社会，自然と関わる ―」寺本潔『社会科におけるフィールドワーク指導技術育成プログラムの研究　研究成果報告書』11～25頁，2007年

３）表３の「子どもがかかわる対象」の具体例については，『小学校学習指導要領解説生活編』（文部科学省）より引用した。

４）2008年に愛知教育大学附属名古屋小学校の今川昌幸教諭の実践した生活科の授業を参考事例として引用した。

〔付記〕

本小論は，科学研究費補助金（基盤研究(C)）の助成を受けた「生活科及び総合的な学習における教師の実践的力量形成のための研修プログラム」（代表：中野真志）の研究成果の一部であり，日本生活科・総合的学習教育学会第18回全国大会鹿児島大会（平成21年）での自由研究発表を加筆修正し，論文としてまとめたものである。学会発表と本小論の執筆は，研究協力者である太町智が中野の助言のもと行った。